

2017年11月18日

## 全体討論

パネラー：ファム・ホン・フン

ダン・ホン・ソン

ファン・ハイ・リン

司会：高久 健二

**高久**：時間となりましたので、最後の討論を始めさせていただきたいと思います。

今回のシンポジウムではベトナム国家大学から3名の先生方をお招きいたしまして、ベトナムと日本の前近代における交流に関するご発表をしていただきました。

討論の進め方としましては、まず、それぞれの先生方がご講演された内容に何か補足説明等があれば、お願いしたいと思います。次に、先生方はベトナムと日本との交流史を専門にされておられますので、それぞれの先生方の発表に対し、ほかのお二人の先生と議論をしていただいて、最終的にはベトナムと日本の前近代の交流関係はどういうものだったのかという点について、理解を深められればと考えております。そして最後に、会場にご専門の先生方がいらっしゃいますので、コメントをいただきたいと思います。1時間という短い時間ではありますが、このようなかたちで進めさせていただきたいと思います。

なお、この討論から、本学文学部の日本学科に留学されておられますヴー・ヴィエット・ユン (Vu Viet Dung) さんに通訳に入ってくださいました。

では、最初にご講演をしていただきましたフン先生から、ご講演に対して何か補足説明等ありましたらお願いします。

**フン**：いま4時半ですから、3時間半という長時間にわたりご参加いただきありがとうございます。ごさいます。

先ほどの報告に少し付け加えるとすれば、今後のベトナムにおける日本前近代史研究では、当然のことではありますが、ベトナム人にとって非常に講読困難な漢文史料を使って研究を進展させる必要があります。私は『御成敗式目』について博士論文を書きましたが、日本語の現代語訳、及びその参考書を利用せざるを得ませんでした。今後はこういった史料の原典にあたりもう一度勉強したいと思います。

**高久**：ありがとうございます。フン先生には現在のベトナムにおける日本の前近代研究の現状と課題についてご講演いただいたわけですが、ソン先生とリン先生も日本との関係をご研究されていると思いますので、それぞれの先生のお立場から、現在のベトナムにおける日本研究の問題

点、そしてこれからの課題や方向性について、ご意見をいただければと思います。

では、ソン先生からお願いできますでしょうか。

ソン：先ほどは時間の関係で話ができなかった部分についてお話をさせていただきます。

私どもの考えでは、最近のベトナムの日本に関する研究では、ベトナムにある史料だけではなく日本にある史料を使うなど、研究協力がだんだんと築かれてきています。これこそ、ベトナムの研究者と日本の研究者にとって最も重要なステップアップだと思います。

ソン先生の研究も良いところを発展させるためには、日本の専門家とベトナムの専門家とが協力して史料にあたるなどの機会をつくる必要があると考えます。

ベトナムでも普段はベトナム人がベトナム史を研究します。いまはベトナムでもいろいろな国の方が来てベトナム史を研究していますし、いろいろな国でベトナム史が研究されてもいますので、こうした協力・交流が、それぞれの研究の発展により良い可能性を与えるのではないかと思います。以上です。

高久：ありがとうございます。ベトナムから日本史を研究する、そして日本の立場からまたベトナム史を研究する、つまり相互研究や共同研究の重要性というものをご指摘いただきました。

リン先生はいかがでしょう。

リン：日本研究学科で1年間仕事をしてまいりましたが、ベトナムにおける日本研究は、どうしたら世界の日本研究の状況に影響を与えられるかと思いつけています。つまり、1990年代以前、まだ「刷新」（ドイモイ）政策の成果が上がっていない時代には、ベトナムでの人文社会科学分野の研究、とりわけ日本研究の方針は、どちらかというとヨーロッパ志向、ヨーロッパスタイルの研究が強かったのです。ベトナムはもともとフランスの教育、研究の影響を受け、その後のソ連時代にはロシアの影響を強く受けました。ディシプリンを大事にする研究を行いました。つまり、各分野を深く研究して、その国の歴史ならその国の歴史だけ、世界史なら世界史だけ、ベトナム史ならベトナム史だけ、つまり、自分の領域の中で細かく深く研究するというスタイルでした。

世界的にみても、1930年代、40年代以前のヨーロッパスタイルにおけるジャパノロジーとかオリエンタリズムと同じようなスタイルで、ある国や地域を研究するときに、その国の文学や歴史、社会学を深く研究して、それで研究成果が出てくるという考え方がありました。ベトナムではそういったディシプリンを中心とする時代が90年代にまで及んでいました。

しかし、西洋では、第2次世界大戦が終わる直前、アメリカからスタートしたエリアスタディーズがかなり注目されました。例えば、日本やソ連などの戦争の相手国をアメリカが全面的に理解するために、その対象地域において何が特徴であるかを描くということ、つまり日本史だけでは足りず、日本の地理、歴史、経済といった全体像をかなりの程度描くということ、それがエリアスタディーズの特徴でした。つまり、いまいうところのマルチディシプリナリまたは学際的、インターディシプリナリの原則が取り上げられ始めたと思います。

そのマルチディシプリナリ、学際的な研究方法がベトナムで重視され始めたのは1990年代後半からです。ベトナムの日本研究もその影響を受け、1995年、ベトナム国家大学のハノイ校とホーチミン校の中で日本研究学科がつくられ、また社会科学院の中に日本研究センターができました。そのとき初めて日本のことを1つの研究の対象として、全体像を描きながら、各分野の研究を進め、その両方を両立させるという研究のかたちが求められ始めました。

その前の研究を見ますと、世界史の中の日本史、文学の中の日本文学というところだけで、お互いの連携やインターディシプリナリなグループ、チームワーク、フィールドワークなどはできなかったということもありましたし、重視されなかったという特徴もあったのではないかと思います。それが1つ目です。

2つ目ですが、いまは、全体の研究を重視しつつ、それをしながら自分の専攻分野で研究するというのは研究者として大変だと思います。そのうえ、フンさんがいったように各研究機関間の連携はまだ弱く、研究所が社会学と経済学を重視するという状況はいまだに続いています。逆に大学のほうでは、文学と歴史を大事にする傾向が90年代以降もまだ衰えていない状態です。このことは、こちらにいらっしゃる（専修大学人間科学部）嶋根（克己）先生もよくご存じだと思います。それはおそらく日本研究だけではなく、各研究機関が従来から得意としている分野に対して、その研究方法、視点を広げるということを大事にしなければいけないということを意識したとしても、それを10年、20年で簡単に変えられるわけではありません。しかし、研究対象は待ってくれませんから、その状況が早く解決しなければならないということも重要な課題だと思います。

3つ目として、いま申しました、ディシプリンのほうが重要であるか、インターディシプリンが重要であるかということは難しい問題です。実はソン先生が教えている歴史学部では、日本史などの1つのディシプリンから学部生を育成して、それが院生になった段階で、1つのディシプリンではなく、論文を書くためにほかのディシプリンの情報や資料、また提供方法などを一緒に学ばせています。つまり伝統のある歴史学部はディシプリンからインターディシプリナリに広がっています。そのように、学部から大学院に広がっていくという教育のルートに対し、私たち日本研究学科は逆の方法で、教育指導を進めています。今回、我々の学生が日本に交流に参っております。彼らが日本語にプラスして日本の全体像を理解するためには、大学の4年間ではどうしても時間が足りません。ですから、日本の地理の授業、歴史の授業、社会の授業、何でも少しずつ撒いてあげます。そうすると、学生にはある程度インターディシプリナリな知識が与えられるのですが、どれも深くはありません。そこが弱点になります。それで、大学を卒業して大学院に進学して初めて研究方法論をきちんと学びます。これから書く論文を何にするか、それを確定して専門性を深めていきます。歴史学部のような逆ピラミッドのやり方とうちのピラミッドのやり方のどちらがいいかということはいまだ結論は出せないと思いますが、やはり、どちらの研究方法にも優位点、弱点があるのだと思います。以上です。

**高久：**ありがとうございました。いろいろと重要なお指摘をいただきました。やはり、これから学際的な研究が重要になってくるということと、大学と研究所との連携の必要性をお指摘いただ

きました。また、最後にご指摘いただいた、ディシプリンとインターディシプリンの比重については、日本の大学でも分野によって違いがあります。私が専門としております考古学は前者のほうに重点を置く場合が多く、大学に入ると、まず考古学の理論や技術を学び、それから自然科学や文化人類学などの関連諸科学分野へと視野を広げていく方法をとる場合が多いと思いますが、それは研究部門によっても違ってくるのかもしれませんが。それはベトナムも日本も同様であるように思いました。ありがとうございました。

では、次に、2番目にご発表をいただきましたソン先生に、ご発表に関して補足することがございましたら、お願いしたいと思います。

ソン：先ほどの話に関して、2つ追加させていただきます。

1つ目は、ベトナム国内で出土する中国の陶磁器と日本の陶磁器をきちんと区別し、日本の陶磁器と中国の陶磁器は違うという認識が初めて出されたのは1990年代です。1980年代、ドンテックという遺跡を発掘した頃から、それまで中国陶磁器だと思われていたものが日本の陶磁器であるということが判明しました。それによって、日本の陶磁器がベトナムに流入していたことがわかり、発掘対象として注目されるようになりました。その後90年代に入り、中部、特にホイアンにおいて発掘が多く行われ、日本の専門家が直接発掘したり、またベトナム人と連携・協力して発掘したことによって、日本製陶磁器についての研究成果が出せるようになりました。逆にいえば、80年代以前に中国の文様が描かれているから中国製だと思われていた陶磁器の中にも日本のものが多く混在しているのではないかという反省もあります。日本の陶磁器の特徴が認識されたことで、今日ご紹介した22カ所の遺跡以外でも、今後発掘していく中で、日本製の陶磁器がたくさん出土することが期待されます。つまり、それは、日越交流が前近代には盛んであったということだけではなく、本日話題となりましたが、こんにちにおいても専門家の学術的な交流がとても重要な役割を果たしているという証拠を示していると思います。本日は話題に出しませんでした。発掘で重要な遺物として日本の貨幣があります。これは、日本の昭和女子大学とベトナム国家大学ハノイ校とが協力して研究対象として取り上げられたもので、今後成果を上げられることを期待します。

2つ目として補足させていただきたいのは、東南アジア地域において出土した7世紀半ばの中国産、ベトナム産、日本産の陶磁器の割合です。オランダVOCの資料によりますと、1633年時点において東南アジア地域に輸出された陶磁器の割合はベトナム北部、つまり先ほどお話したダングアイからは30%、中国からは36%、そして日本からは33%でした。つまり、ほとんど3分の1ずつ輸出されていたことが分かりました。

本日、このような機会を与えていただきましたので、これをきっかけにして今度は専修大学の先生方とベトナムの陶磁器が日本においてどのように発掘されたか、どのような特徴があるのかということに関連する情報があればそれらについて意見交換していきたいと思えます。

当方からの追加は以上となります。ありがとうございました。

高久：ありがとうございました。考古学の分野では、以前から日本とベトナムとの間で共同研究

を行っておりますが、今後もそのような学術交流が重要であることをご指摘いただきました。

フン先生はいかがでしょう。考古学という別の分野ですが、同じ歴史学というところから見て、何かご意見がございましたらお願いいたします。

フン：1つ目として、私は考古学については専門ではありませんが、ときどき調査やシンポジウムに参加することがあります。私は学生1年目のときにオランダでのシンポジウムに参加し、レジュメを見て「ホイアン」や「朱印船」などというキーワードを初めて目にしました。その後、ホイアンの考古学調査における成果の進展、及びベトナム人研究者による、例えば「Biển Đông」（南シナ海）の港に注目した研究が進められることとなります。これはホイアン国際シンポジウムによる成果だと思っています。

2つ目ですが、現在タンロン王城は見学できますが、いま、研究者は史料だけを読んで、遺跡の調査はほとんど作業員に任せています。そうすると、研究者が発掘していないため、いろいろな遺物が破壊されてしまう恐れもあります。ベトナムではそういった問題点があります。実は2012年頃、ホイアンで昭和女子大学の菊池先生や阿部先生と一緒に発掘した際、出土した肥前焼の修復がすぐさま開始されました。先ほどソン先生の発表の中にもありましたように、いま、その修復作業が最終の段階であるということです。遺物が破壊されてしまうとそれだけ修復作業に時間がかかるということだと思います。

最後にソン先生のご発表の中では、民間のコレクターが持っている肥前焼についてはふれていませんでした。私の知る限りでは民間のコレクターはかなり多くの肥前焼を所有しているようです。それをソン先生は調査されていないようなので、論文の信頼性を高めるためにも、今後は是非調査していただきたいと思います。以上です。

高久：ありがとうございます。リン先生はいかがでしょう。

リン：私はソン先生のお話の中で、まず、各遺跡でこのような陶磁器が出てきたというお話をとっても興味深くお聞きがいたしました。ただ、できればその文様をもう少し分析してもらいたい、つまりグルーピングをしてもらいたかったと思います。ベトナム人の感覚では龍と鳳凰は必ず貴族や王族でなければ使えないという特徴があります。もちろん、この時代に入って、必ずしも海外のものが王族や貴族しか使えないということではなかったかもしれません。つまり、貿易がかなり盛んになった時代だからです。

それにしても、先ほどソン先生の結論の中に、肥前焼がかなり高価だったので王族や富裕層が使っていたというお話があったかと思いますが、文様やその遺跡の特徴も見て、使う人、使う対象を判断することも1つの手がかりだと思います。特に5つの爪のものは必ず王様でなければ使えなかったはずで、4つや3つの爪であれば貴族や官僚たちが使うというイメージが最近までありました。ですから、もちろん、破片で出てきているものではその分析はできないかもしれませんが、どのような文様が出てきたかということなども含め、少しグルーピングしたほうがいいのかと思いました。

2つ目は、レジュメの地図ではベトナムの22カ所の遺跡がどこにあるかということを示していますが、できれば時代ごとの出土地の区分もしてもらいたいと思います。すなわち、その遺跡はどの時代のものであるのか、例えば16世紀はこのあたり、17世紀はこのあたり、18世紀はこのあたりから出てくるとか。或いは史料と合わせて、この種類の陶磁器は貿易港を中心に回っていて、それが山まで広がってきた場合には、最初に出回った時代より下っているなどといった結論を出せることを期待しております。

3つ目ですが、ベトナムにおける陶磁器、ベトナムにおける肥前焼ということ認識の上で、報告では中国の海禁やあるいは日本の鎖国ばかりを背景にしており、ベトナム国内の状況をあまり紹介しなかったため、ベトナム史にあまり詳しくない方には難しかったのではないかと思います。できればベトナム国内の情勢を入れたほうが理解しやすいのではないかと思います。

**高久**：ありがとうございました。考古学では分類学が最も基本的な方法論でありますので、陶磁器研究においても重要であるということだと思います。

いまのリン先生のコメントとも関連しますが、会場から質問が来ておりますのでお答えいただきたいと思います。ソン先生のご発表の中でお示しいただいた写真の中にさまざまな陶磁器がりましたが、その中で高級品と日常品の区別はなかったのでしょうか。もしお分かりになりましたらご回答いただければと思います。

**ソン**：このご質問に関して、これまでの研究では普通の商品と高級品との区別をするという考え方があります。まず、位置としてタンロンで発見されたものほとんどはベトナム歴代王朝で使用された高級品でした。ただ、オランダVOCの史料によりますと、1666年から1681年にかけて陳王から12回日本への注文がありました。その中の一例ですが、1681年の6月、ベトナムが日本から6,000個の陶磁器を買ったというものがあります。つまり高級品ばかりではなく日常品も購入していたということです。

次は墓から出土したものについてです。日本からの陶磁器と中国からの陶磁器（日常品）と一緒に、ベトナム製の高級なものが発見されております。すなわち質問にありました、高級品と日常品の区別につきましては、見た目や出土地点だけではそれが高級なものなのか、普通のものなのかという判断基準にはなり得ないということです。

先ほどリン先生もお話されましたが、歴代ベトナム王朝では龍の文様は王様しか使えなかったため、その文様のある陶磁器は高級品だと考えられます。この種の陶磁器は他の地域でも出土しますが、ほとんどはタンロンから出土しています。以上です。

**高久**：ありがとうございます。ここでソン先生のご発表に関して、会場からコメントをいただきたいと思います。本学で陶磁器を研究されておられる高島（裕之）先生がいらっしゃっておりますので、コメントをいただければと思います。

**（フロア）高島**：文学部の高島です。本日は貴重な講演をお聞かせいただきましてありがとうございます。

ざいました。

私が研究しております分野は有田の染付磁器ですし、また、何年前かに昭和女子大学の菊池先生にご指導いただきホイアンの陶磁器調査に参加させていただいたこともありまして、興味深くソン先生のお話を聞かせていただきました。

肥前焼き物、「肥前陶磁器」ですが、これは日本の佐賀県、長崎県で焼かれた焼き物の総称で、考古学でも研究されています。その中心であった有田の状況を見ていきますと、まず1610年代に染付磁器が誕生します。そしてその後有田では、1637年に窯場の整理統合をしまして、磁器を専ら作る体制をつくっていきます。1640年代から50年代にかけて色絵の技術の導入や、景德鎮の磁器と同じような姿を作るための高台を広くする技術を導入していきます。そういった中で有田磁器の輸出時代が始まります。

今回ソン先生のお話にもありましたように、日本の染付というのは朱印船貿易の時代にはあまり出てこないということがいえると思います。実際に、日本の染付磁器で多く運ばれたのが、このソン先生の資料の1枚目の裏側にありますが、外側に竜、内側の底に荒磯文といって波と魚の図を描いた染付碗、そして3枚目の表にあります中央に「日」の字を書いて鳳凰を周囲に描く染付皿です。それが現在の日本の肥前磁器の編年ですと、竜の染付碗が1650年代に出てきます。そして鳳凰の皿が1640年代から50年代に出てきます。この染付製品というのは何も有田だけで焼かれたわけではなく、有田以外のその周辺、山を越えたところが長崎県の波佐見ですがそこでも焼いていますし、佐世保でも焼いています。また、佐賀県の嬉野でも焼いていますし、現在、佐賀県立九州陶磁文化館で熊本の焼き物を展示していますが、熊本県の天草でも竜文の染付碗が焼かれていました。ですから肥前一带で焼かれた、このような輸出向けに大量に作られた時代の製品がベトナムで出てきているといえると思います。

中国の海禁政策の中で中国の磁器の代わりに日本の製品が入っていて、そういった研究が昭和女子大学を中心としたベトナムの研究の成果によって深まっていますし、それ以外にも東南アジア考古学会など考古学研究者の研究によっても各国、特に最近ではこのベトナムからかなり内陸に入ったラオスにどのようなものが運ばれたかというのも興味のあるところだと思います。

実際に、ベトナムというのはインドシナ半島の沿岸部に位置するところで、日本の製品が入ってくる中継地でもあると思うのですが、そういった中継地であるときに、ほかの内陸も含めて東南アジアに運ばれた記録やルートが解っているのかどうかというのが、今日のお話を聞いていてうかがいたかったことになります。是非、おうかがいできればと思います。よろしく願いいたします。

**高久**：先生、ありがとうございます。陶磁器研究に関する理解が進んだかと思います。ご質問につきましては、本日は時間の関係がありますので、のちほど個人的にお願いできればと思います。

もうおひと方、実際にベトナムで発掘調査をされておられる菊池百里子先生が会場にお越しになっておられますので、是非、コメントをいただければと思います。

(フロア) 菊池：ただいまご紹介いただきました人間文化研究機構の菊池百里子と申します。今日の先生方のご発表の中で「阿部さん、阿部さん」と名前が挙がっていましたが、これは私の旧姓でございます。いまは菊池百里子という名前で研究活動をしております。

本日は、専修大学古代東ユーラシア研究センターで、日本とベトナムの交流に関するシンポジウムを開催していただきまして、日本とベトナムの交流史を研究しております私といたしましては大変ありがたいと思っております。あらためて御礼を申し上げます。

コメントをとということですが、陶磁器に関しましては高島先生から今お話がありましたので、私からは、ここ数年考古学調査を行っておりますホイトン遺跡について少し補足説明をさせていただきます。

朱印船貿易が始まりました17世紀、ソン先生のお話の中にもありましたが、3分の1の朱印船がベトナムに渡航していました。そのほとんどがベトナム中部の港町ホイアンに寄港していたのですが、もう1カ所、日本の朱印船が寄港していた貿易港があります。それがホイトンです。ホイアンよりも北の、北中部にあるゲアン省とハティン省との間を流れるラム川の河口部にあります。

このホイトンに寄港し交易していたのが、京都の豪商である角倉家です。1603年に朱印船貿易が始まりますが、その開始にあたり角倉素庵は「船中規約」という、貿易を行う際の心得を書き記しています。例えば交易にあつては、その利益をお互いに分かち合うことは、利益は少なくなるけれど、いずれかえって大きくなるということや、異国の風俗を嘲ることなく、その国のしきたりや習慣に従わなくてはならないというようなことが書かれています。この中には、角倉家がベトナムと長期的な交易関係を持ちたいという思いが現れていると思います。

先ほど高島先生から、インドシナ半島内陸部から海への出口はどこだろうか、というお話がありました。私はこのホイトンであったと考えています。ちょうどラオスとベトナムの国境のところに、チュオンソン山脈があり、森林生産物の香木などがたくさんとれます。そのラオスの産品をアジア交易のネットワークの中に送り込む上での最短ルートがこのラム川です。ラム川の源流はチュオンソン山脈にあり、この川を使って河口部に下りてきますから最短になります。そして、その河口部のホイトン遺跡で発掘調査を行いましたところ、先ほどソン先生のお話にあったように、肥前磁器が出土しました。

話を朱印船貿易に戻しますが、交易を行っておりました角倉家が1609年にラム川河口部で沈没事故を起こしてしまい、十数人の乗組員が亡くなり、百数名の乗組員が助け出されました。その助けられた乗組員たちがその後どうなったかといいますと、ゲアン地域、ハティン地域の有力者の方々の家に預けられ、食べ物や衣服などが支給され、さらにベトナム側で船を建造し、その船に乗せて無事に日本へ送り届けたという、人道的な出来事がありました。このことは、まさに角倉素庵が「心構え」として書いた、利益をお互いに分かち合うことは、利益は少なくなるけれど、いずれかえって大きくなるということに、つながる話ではないかと思います。

もう1つ、この話にはおまげがあります。それがソン先生の本日の配布資料の中にもあります。沈没船から引き上げられた女性がベトナム人の養女となり、その後、ハティン地域の有力者のグエン家に嫁いできた、と記述された家譜です。沈没船というのは、おそらく1609年に沈ん

だ沈没船で、その船から引き上げられた女性が有力者の養女になり、その後、現地の有力者のグエン家に嫁いだことがわかる史料です。この家譜を保存していたグエン家の子孫たちは、今もまだハティン省に住んでいて、家譜の直系の子孫の方にもお会いすることができました。これは、400年前の友好関係の証が現代まで継承され、今の私達に伝えているという、非常に興味深い話だと思っております。

いま、日本とベトナムは経済的にも政治的にも非常に友好的な関係を築いております。この背景にはベトナムのドイモイ政策という、経済を発展させていくという政策に基づいているところが非常に大きかったと思います。ただ、ベトナムも経済的にかなり発展してきましたので、今後は、日本とベトナムの新たな交流関係を築いていかなければならないと思います。ある意味、これまでの我々の日越関係というものの真価が問われているといえます。

これまでの、そしてこれからの、ハノイ国家大学と、専修大学や昭和女子大学をはじめとする私のような多くのベトナム研究者との共同調査研究が、今後の新しい日越の友好的な交流関係を築いていく上での盤石な基盤構築の一助になればと考えております。大変簡単なコメントですが、以上です。

**高久**：ありがとうございます。やはり、現地調査に携わっておられる先生からのコメントは非常に重要であります。

時間が過ぎておりますが、最後にリン先生から追加のコメント等がありましたらお願いいたします。

**リン**：あまり時間がありませんので、追加として1つだけ申し上げます。

先ほどゾウがベトナムから日本に来るのに37日間かかると申し上げましたが、普通、人を乗せる船であれば27日間しかかからないという別の史料がありましたので、その点はレジユメの中にも少し引用しました。それはゾウを乗せる船はサイズが大きいため、普通の船よりも時間がかかったのではないかとということです。

2つ目としては、ゾウを1頭だけ運搬するのでもお金がかかりますが、どうして徳川吉宗の時代にわざわざ2頭運んできたのかについて以前から疑問を抱いておりました。結論は出せませんが、仮説としては、1頭買ってくるのではなく、できれば雄と雌を長く飼育して子どものゾウをつくっていくこと、つまり日本でゾウを繁殖する計画があったのではないかと想像しています。

反省ですが、2009年からいままでゾウに関する史料を集めてまいりましたが、まだ明らかにすることが多くあります。1つとして、先ほどふれました値段についてはいまのところ仮説しかなく、お金の比較は難しかったわけです。江戸時代の研究者にもご見解を仰ぎ、今後も両替などお金に関する史料を集めたいと思っております。また、徳川家康の時代にゾウがトラと共にベトナムから運ばれてきたという史料が一片しか残っていませんが存在いたします。それについても他に史料があれば活かしたいと思っております。以上です。

**高久**：ありがとうございます。リン先生のご発表に関しまして、専修大学文学部で近世史を担当

しておられる西坂(靖)先生からコメントをいただければと思います。

(フロア) 西坂：専修大学文学部で日本近世史を担当しております西坂と申します。リン先生の報告は大変分かりやすく、興味深くお聞きいたしました。

これまで日本とベトナム等東アジアの関係については、17世紀に朱印船貿易と日本町がなくなり、日本人の海外渡航が禁じられた後は、近代に至るまで空白の期間であったかのように思われていますが、実はそうではなく、享保期のゾウの渡来という事件がありました。この事件は日本史の研究者から見ると2つの興味深い点があります。

1つは民衆レベルで、実際に見た人は限られていたでしょうが、生きて動くゾウを見るということは、当時の人々の世界認識に大きな刺激を与えたのではないかと思います。それが、先ほどリン先生がおっしゃっていた「キャラクター化」による普及にもつながっていったのではないかと思います。

もう1つは政治のレベルで、これは徳川吉宗政権に関する問題です。珍しいものや動物を遠くから持ってこられる力、強大な権力を実際に示すということで、この時代に限りませんが、王権に関する一般的な論点にかかわる興味深い事件だったと思います。

このゾウの渡来については、従来は中国人商人の活動のほうに目がいていたと思いますが、それに対し日本とベトナムとの交流という観点を明確に打ち出したのが、リン先生のご研究だと理解できると思います。さらに、今日のご報告はゾウの渡来だけではなく、ベトナム側におけるゾウの国家的な管理、流通も含めてご説明がありましたので、事件の背景や構図がいっそうよく理解でき、分かりやすく面白くお聞きすることができました。

高久：簡潔にありがとうございました。すでに時間が過ぎてしまいました。

最後に、本日、何回もお名前が登場しておりますが、実際にホイアンの日本町の発掘調査をされておられます、昭和女子大学の菊池誠一先生に総括的なコメントをいただければと思います。よろしく願いいたします。

(フロア) 菊池：昭和女子大学の菊池でございます。本日は、古代東ユーラシア研究センター主催のシンポジウムに参加できましたこと、大変に嬉しく思っております。

私はベトナムの歴史、特に考古学を研究しています。これまで日本の大学でベトナム人研究者だけをお招きして、シンポジウムを開催することは非常に少なかったので、とてもありがたいイベントだと思います。

日本とベトナムの学術交流の最初は、人文学に限れば、1990年のホイアン国際シンポジウムが大きな飛躍の原点だったと思います。同時に日本の考古学研究者が率先してベトナムの地に入り、ベトナムと共同調査を展開しました。この考古学共同調査は、資本主義国の学界では日本が初めてでした。そういう経緯のなかで、私は現在でもベトナムでフィールド調査をしております。もう二十数年間、日本とベトナムは考古学の世界で学術交流を進めてまいりました。

この間、私たちも歴史資料などをたくさん見て、日本との歴史的関係を考える機会をいただき

ました。本日のソン先生のご発表は、私と一緒に調査した考古資料がたくさん出ていました。その中で、高島先生がお話されました日本の肥前磁器の輸出にかかわる重要な問題があります。北部ホアビン省の少数民族であるムオン民族のドンティエク古墓群は、国の史跡に指定され、そこに碑文があります。碑文には年号が刻まれ、例えば「1647年に亡くなった人が1650年に埋葬された」という内容が漢字で書かれています。その墓から、肥前磁器が出土しています。それは、先ほど高島先生がお話しされた荒磯文の碗、これは日本で1655年以降に生産されたと考えられています。しかし、1650年に埋葬された墓から出土しています。その年代はわずか数年の違いですが、重要な問題を孕んでいます。

同時に、その墓からは、スライドでも出ていましたが、肥前の色絵皿が出ています。日本側の記録では色絵の生産に成功するのが1647年ぐらいです。ですから、本当に初期の頃に作られた日本の色絵皿がムオンの墓まで運ばれたということになります。このような問題を提起することになりますので、日本の研究者と研究を深めていかねばならないと思っています。

リン先生がお話になったように、その資料はベトナム国内の歴史的背景を解明する史料にもなるのです。北部と中部では、当時は政権を担っていた支配者が違い、北部政権と中部政権は百年近く戦争をします。そのため、北部と中部の交流はほとんどありません。それは中部の港町ホイアンの考古学調査からもわかってきました。そこでは北部の製品はほとんど出土しません。同時に、中部では磁器生産ができませんので輸入品に頼らざるを得ないということになります。北部はベトナムの製品が作られていますし、中国の製品がたくさん入ってきますので、日本の製品は日用品というよりも、タンロン王宮やムオン領主墓に見られるように、特殊な扱われ方をした製品ということになります。ムオン民族地域になぜ入るかという点、黎朝政権は西方地域の安全保障等のため、ムオン民族の領主と主従関係を結びます。そういうことが歴史書に言及されています。おそらく、日本の製品はその下賜品に使われた可能性があります。そのような意味では、一般的な陶磁器でも、その資料を活用してベトナム社会の歴史的な構造を解明する重要な資料になると思います。

また、リン先生は巧みな日本語でご発表されました。ベトナム国家大学人文社会科学大学の日本学研究科は若手の優秀な方が日本に留学に来て、日本語をしっかりと学びながら研究されています。しかし、フン先生がお話になったように、古文書などの一次史料はまだ十分に使い込まれていません。ですから、私は専修大学の日本史研究の先生方に、是非ベトナムへの支援とさらなる学術交流をしていただきたいと思っています。そうすれば、ベトナムの日本学研究はさらに発展することになります。

私は20年前に専修大学の日本近世史の教授でいらっしゃった青木美智男先生と一緒にベトナムにいったことがございます。ほかに早稲田大学の先生方もいらっしゃいましたが、日本の先生方と人文社会科学大学歴史学科の先生方がお会いする機会がありました。そのとき、青木先生は今後の研究交流のお話をされていましたが、それがいま実現できていることに感激し、大変嬉しく思っております。

最後になりましたが、日本史学の先生方をお願いがござります。日本史学を学ぶ若い院生にベトナム留学を薦めていただき、ベトナム語資料を活用できる次の世代を育成していただきたいと

思っております。日本史学の次の世代は、アジアの言語を必ずマスターしながら、学术交流と研究を続けていっていただければと思います。以上です。

**高久**：重要なお提言をありがとうございました。

最後に、本センター研究員の荒木先生から今回のシンポジウムの総評をいただきたいと思います。

**(フロア) 荒木**：専修大学をこの3月に定年で辞めました荒木でございます。まだ、研究員の籍は残っておりますので、最後のご挨拶をさせていただきます。

このプロジェクトは、飯尾代表から説明がありましたように、もう12年やっております。当初、「東アジア」といっておりましたが少し範囲を広げました。ただ範囲を広げただけではなく、「東ユーラシア」という言い方の中で、中国を相対化しながら、アジア全体の中で日本はどうか、ベトナムがどうかあるのか、また、韓国がどうかあるのか、という歴史の見方を検討してみる試みを行ってきました。それは人の流れ、ものの流れ、人流・物流、とりわけ人流にポイントを置いて、検討してまいりました。人は、ものを持って動きますし、ものの動きは実は動かす人間の流れでもあるわけです。こうした点に留意しているので、我々は人流をメインテーマとしても、物流の問題は、当然シンポジウムで取り上げるべきと考え、これまで取り組んできました。

本日は、ベトナムでの日本前近代史の取り組みの大勢を報告いただいた上で、人ではないという意味で物流になりますが、ゾウの交易という非常に興味深い報告があり、時代は相違しましたが、「染付」の報告もうかがうことができました。非常にワクワクするような事実が、まだ私自身の知識のないこともあって、もっと知りたいという部分が多くありました。時間の関係もあってなかなか出せなかったところもあるかと思いますが、例えば遺跡の地図も1番から十いくつか挙がってきましたが、もう少し時代別に区分けしたほうがいいとか、その他それぞれの遺跡の特徴みたいなものがどうなのか、それも知りたいところでした。リン先生のゾウの報告については、ゾウが日本社会に与えた意味、歴史的な意義のようなものは西坂先生がおっしゃってくださったような部分があるのではないかと思います。

今回ベトナムの3人の先生がご講演くださいました。フン先生は専修大学大学院を出ております。また、今回はお見えいただいておりますが、いま一方、日本近代史を専攻されるベトナム国家大学ハノイ校の先生も本学大学院で学ばれた方です。人流をテーマとするこのプロジェクトの真骨頂がここにあると思えます。

北朝鮮や韓国を中国から見たときにどうなのか、今回は入れませんでしたから対比はできませんが、同じような時代、また時代を超えても当然のことながら辿れば交流という糸はつながります。

そういう交流というものが明かすダイナミックな歴史、アジアというのは陸路だけではなく海もという見せ方ももちろんあるわけですが、そうしたところから見ていくとどうなるのであろうか。これまでとは違った見方が生まれてくる。

こうした新しい地平を切り開く歴史的視野の提示は、このプロジェクトの使命ですし、歴史研

究をやる者の使命であると思っております。今回は研究者の交流という面でも非常に大きな成果が上がったと自負しております。

そして、先ほど菊池先生がおっしゃられたようなスタイルについては実は私も別のところで申し上げたことがあります。日本の学術研究は日本史しか知らない研究者はもうこれからは立ち行かなくなるのではないかと、少なくとも片足はどこか外国に置くことが必要でないかと思っております。そういう歴史学も必要だということをお話したところでも述べたことがあります。

「きみは（専攻が）日本史なのですか」と質問されるような方が現に出てきており、これからアジアをまたにかけて日本史を研究する新しいスタイルの研究者がもっと増えて欲しいです。専修大学の場合はまだ十分ではありませんが、学びのスタイルが少し変わってきています。

ファン先生が指摘された、ベトナムにおける大学の日本史教育の打開すべき現状もあるでしょうが、これから期待するところも大きいと思います。我々も協力は惜しまないつもりです。今日は、これからのベトナムにおける日本史研究を進めていくキーパーソンの方々がお見えになり、悩める部分もお話いただきました。

このプロジェクトはもうあと1年ありますし、さらにはその1年を終えた段階でもう1つ次の、5年先のプロジェクトも検討すべき課題になると思います。

つながったベトナムとの研究のリングを大切に、今回、お見えいただいた3人の先生とも今後もしっかりと交流をつなげていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

今回は、本当に貴重なご報告をいただきましてありがとうございました。

**高久**：ありがとうございました。

時間が過ぎてしまいました。長時間にわたりましてシンポジウムに参加していただきまして誠にありがとうございました。本日の成果は来年の3月に刊行されます『年報』に掲載し、公開していきたいと思っておりますのでまたご期待いただければと思います。

では、最後に、3人の先生方に盛大な拍手をお願いいたします。(拍手)

【了】